

氏 名 後藤 隆基
学 位 の 種 類 博士 (文学)
報 告 番 号 甲第364号
学 位 授 与 年 月 日 2014年 3月31日
学 位 授 与 の 要 件 学位規則 (昭和28年4月1日文部省令第9号)
第4条第1項該当
学 位 論 文 題 目 高安月郊研究——明治三十年代の劇壇登場期を中心に
審 査 委 員 (主査) 藤井 淑禎
水谷 隆之
源 五郎 (日本女子大学名誉教授)

I 論文内容の要旨

論文名…高安月郊研究——明治三十年代の劇壇登場期を中心に

(1) 論文構成

序

第Ⅰ部 高安月郊の位置

第一章 高安月郊研究のために

第二章 高安家の系譜

第三章 明治三十四年の川上音二郎

——大阪朝日座における新演劇大合同の考察

第Ⅱ部 高安月郊の出発

第四章 高安月郊と京都演劇改良会（一）

——明治三十年代の京都文壇／劇壇の周辺

第五章 高安月郊と京都演劇改良会（二）

——第三回改良演劇の実体と、その挫折

第六章 「江戸城明渡」考——高安月郊と川上音二郎

第Ⅲ部 高安月郊の諸相

第七章 「浮世之責」考

——明治期における『レ・ミゼラブル』翻案の一事例

第八章 「さくら時雨」考——初演と高安月郊交流圏

第九章 高安月郊と明治大正期の楽劇（歌劇）

結

主要参考文献一覧

(2) 論文の内容要旨

本論文は、劇作家・高安月郊について、明治30年代の劇壇登場期を中心に、京阪を拠点とする活動や同時代文壇／劇壇との関係を考察したものである。

第Ⅰ部では、第Ⅱ部以降の議論の前提となる問題について述べている。第一章では月郊の略伝を記した上で先行研究史を整理し、月郊に対する評価の変遷について概観している。第二章では、高安家系図等未紹介資料を翻刻・紹介し、近世以来大阪に代々続く医家である高安家の系譜を検討している。第三章では、月郊登場以前の演劇的土壌を検討する試みとして、明治34年に海外巡業から帰国した川上音二郎の帰朝記念公演、とくに帰国直後の大阪朝日座における新演劇大合同をとりあげ、その公演の実態を明らかにしている。

第Ⅱ部では、月郊の劇作家としての実質的な出発について検討している。第四章では、月郊が初めて演劇現場と接触する京都演劇改良会について、明治35年の発会時の改良理念、京都文壇／劇壇の人脈に基づく月郊の改良会参画、新俳優の福井茂兵衛が〈改良演劇〉の実践者となる経緯を考察している。第五章では、前章の議論をふまえ、従来未詳だった福井茂兵衛一座の第三回改良演劇について考察している。この舞台は失敗と評され改良会の最終公演となるが、一因として福井以外の主力俳優が脱退し、脚本中心の演劇改良という方針を共有できなかったことが考えられるとして、局外の作者主導による演劇生成に対する現場の限界を指摘している。第六章では、月郊の東京進出作「江戸城明渡」の川上音二郎による初演（明治36年）について上演までの経緯と舞台の実態を究明している。月郊は音二郎との協働を通して、作者の理想だけでは成立しえない現場の現実を初めて体験したとする。

第Ⅲ部では、月郊の劇作活動の諸相を検討している。第七章では、ヴィクトル・ユゴー作『レ・ミゼラブル』の翻案劇「浮世之責」をとりあげている。明治38年の新俳優による同作の上演が『レ・ミゼラブル』の本邦初演にあたりとし、明治期における『レ・ミゼラブル』受容史を検討し、月郊が「浮世之責」で試みた独白による登場人物の内面表現にも言及している。第八章では、吉野太夫と灰屋紹由・三郎兵衛父子との関係を描いた月郊の代表作「さくら時雨」をとりあげ、作品の成立や典拠の問題を検討し、明治38年の初演を支えた岡本橋仙と月郊の関係を視座に月郊交流圏を明らかにしている。第九章では、月郊の事績をたどり、明治大正期の楽劇（歌劇）について考察している。俳優が自ら歌い、演じる「新楽劇」を提唱した月郊は一貫して〈歌〉を基底とする詩と音楽と劇の融合、他分野と協働する新形式の可能性を問い続けたとし、その変遷を検討することで、明治30年代から大正期へ架橋される月郊の文業が垣間見えると主張している。

II 審査結果の要旨

本論文は、一時は日本の近代演劇の革新者として坪内逍遙、森鷗外と並称されながらも、現在では注目されることも稀となった高安月郊(1869-1944)の劇壇登場期(明治 30 年代)に着目して、その出自、初期作品群の変遷、演劇改良問題、京阪文化圏問題等に新たな光を当てようとしたものである。月郊に関しては詳細な著作年表・資料年表が備わり、演劇、歌舞伎、文学、さらには京阪圏などに特化した年表や文献目録も多数存在するが、第一章ではその密林中に分け入り、プライオリティを尊重しつつ、原資料にもあたり直すことで、少なからぬ誤りを訂正するという成果をあげている。

第二章では、従来未紹介の高安家の系図を紹介し、大坂に代々続く医家である高安家の文化的位置を明らかにし、文化人としての医師という側面を浮かび上がらせた。第三章では、月郊登場以前の大阪劇壇と関わりの深い川上音二郎の第一次海外巡業帰国直後の大阪朝日座における公演(明治 34)を初めて本格的に取り上げ、その実態と意義を明らかにした。第四章と第五章では、月郊が最初に演劇現場と関わった京都演劇改良会(明治 35)に注目し、月郊における劇作家の誕生の経緯を明らかにしている。そこでは、改良をめぐる、劇場運営、俳優側と作者側との確執、観客の質の問題等が俎上に載せられている。第五章では従来詳細不明とされてきた改良会の第三回公演(明治 36)について考察し、月郊の『レ・ミゼラブル』の翻案劇「浮世之責」が急遽差し替えられた経緯を明らかにし、その背後には、作者・役者・舞台をめぐる演劇生成の現場における混乱と限界とを指摘できるとした。

第六章では、月郊が東京劇壇進出を果たす「江戸城明渡」(明治 36)について考察し、従来からの歌舞伎俳優たちとの論争問題ではなく、音二郎と月郊が試みたセリフ重視の方向性などを検討している。第七章では、『レ・ミゼラブル』の翻訳・翻案状況を踏まえつつ、福地桜痴の翻案脚本(未上演)と月郊の「浮世之責」(明治 38 年上演)とを比較し、月郊の〈独白〉による内面表現の意義を明らかにした。第八章では、月郊にとって転機となった時代物の「さくら時雨」(明治 38)をとりあげ、作品の成立や典拠の問題、舞台化を支えた文化人たちとの交流を明らかにし、明治 30 年代の京阪文化圏という問題に肉薄した。

このように本論文は、劇壇登場期の月郊研究として多くの実証的成果を上げており、今後に向けての課題(本格的な作品分析や月郊戯曲全体の検討、イブセンに代表される外国文学との関係、演劇改良における東京との時差の問題、演劇史における旧劇(歌舞伎)対新劇(壮士芝居、新派、新劇)の相関図の中に月郊を位置づける作業など)は残るものの、初めての本格的な月郊研究として、本論文の意義は高く評価されなくてはならない。